恋の七夕

ていく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋の七夕

【Ｎコード】
Ｎ２５９９ＢＡ

【作者名】
ていく

【あらすじ】
七夕の前の日。
二人の曖昧な関係がちょっと崩れた日。

◆◇◆◇

「よぉ」
よく見知った女の子に話しかける。
くるっ。と振り向いたその顔は仏頂面で不機嫌そう。
「なに？用があるわけ？」
「そんなギスギスすんなよ」
幼なじみのこいつは正直扱いづらい。素直じゃないの。素直だったらもっと萌えなのになぁ…なんて言ったらブッコロされるから言わないでおこう。以前痛い目をみたからな。
「で、早く要件を言って頂戴」
「要件なんてねーよ、挨拶しただけだろーが」
「は？それだけで話しかけて来たの？ばっかみたい」
「わーるかったな。次からは話しかけません。これでいいだろ」
「え……あ、そうして頂戴！」
語気が強くなった気がするのは気のせいだろうか。それにしても昨日夜更かししたから目がショボショボしてくる。眠い。
それから僕らは黙々と通学路を歩いて行く。

◆◇◇◆

「うげ」
「うわ」
「また居やがった」
「また来たの？」
「あぁ、だってここなら集中出来るだろ」

「あんた勉強人間だっけ」
「んな訳ねーだろ」
「ならなんで勉強道具持ってんの？バカみたい」
「あのな、なんでもかんでもバカみたいっていうの止めろ」
「だってバカみたいじゃないの」
「駄目だこいつ言うこと聞かねぇ」
「で？注文は？ドリンクバー？」
「あぁ。わかってるじゃねぇか」
「ん……何を言ってるの？バカになっちゃった？」
「ぐっ……この野郎……」
アルバイトをしている彼女と別れ、ドリンクバーのコップ片手に勉強をはじめる。

「学生は帰る時間よ、帰りましょう」
「あれ？もうこんな時間か」
「ええ、さっさと帰らないとお父さんが怒っちゃうから」
「あー、そうだったな。お前んちの父さん厳しかったなぁ」
「ふん」
「なぜこのタイミングで？」
「ノタノタ遅いからよ。先いくよ」
「あぁ待て待て今いく」
「遅いわよ、バーカ」
「まぁ送っていってやるから」
「当たり前でしょ？早く行くわよ」
「はいはい今いきますよお姫様」
「な…なに言ってんの？お姫様なんて……」
「ん？最後何て言った？」
「う、うっさい！バーカバーカ！」

彼女の家はマンションだった。
「ん、んじゃここまでいいわ」
「そうか、じゃあ帰るか。じゃあな」
「あ……ちょ…」
「？帰るぞ？じゃな」
「あ……」
彼は自転車に乗り直すと即座に闇へ消えていった。ちりんちりんとなったベルはさよならの合図だろうか、すこし前時代的な匂いが漂う。

「……ばか」

「明日は……取り敢えずバカって言うのは止めようかな……」

◆◇◆◇
「よー」
「なに？また来たの？鬱陶しい」「んだよ。挨拶しただけだろ？」
「それが鬱陶しいのよ」
「そーですか」
「そーなのよ」
……
……
……やがて重い沈黙に耐えられなくなった彼は、重い口を開いた。
「なんで言わないの？」
「へ？」
「いや、今日は『バーカ』って言わないんだなって」
「そ、そんなことないわよばーかばぁーか！！」
「やっぱいつもどうりなんだな」「……うん」

◇◆◆◇

正直、彼女がばかって言わないことにすごく驚いたのだが、やっぱりすぐに戻ったか。正直に僕の話を聞いてくれたと思って結構うれしかったのになぁ……

「はぁ……」

まぁいまさらそんなこと言っても無駄な訳で

「帰ろうか……」

◆◇◆◇

「うーーー」

決心が一秒で揺らいでしまった……。どうして自分はこうも弱いのだろう……。こんなことじゃあ……。

「帰ろうかな……」

◆◆◇◇

運命っていうのは奇妙なものだ……というのは本当らしい。

「あ」

「あ」

「なにしてんの」

「良いじゃない別に、あなたこそ何してるの？ばーか」
「あのなぁ……こうやって息抜きにこういうところに来ても悪くないだろ？」
「知らないわよばーか」
「おまッ」
「で、何？こういう時は奢るのが男じゃないの？」
「は？お前奢らせようっての？」
「うん」
「はぁ……、メニュー頼めよ……」
自分は女には弱いのかもしれないな……。
「何か言いたかったんじゃないのか？」
「へ？そんなことないわよ……」
「そうか」
「な、何でそんなこと言ったの？」
「うん？いつもとは違う顔してたからな」
「は？」
「いや、いつもと違う顔してるからなーと、いつも見てる顔とは違う」
「へ……あ、」
「うん」
「なに言ってんのよばーかばーか！！」
「なんだよ、別におかしいことといってないだろ」
「だからあんたはバカなのよ！テストの平均もとれない癖に！ばーか！」
「ちょっ、おま、それ以上言うな！」
「なに熱くなってんの？バカみたい。バカは考える脳みそも無いのね」
「お前、言っていいことと悪いことがあるぞ！いくら幼なじみだからって礼儀ぐらいあるだろ！」
「っ……」

「なんなんだお前、帰るわ」
「あ……」
「じゃな」
すぐに夕闇に消えた彼の姿はもう見えない……。

「あ……ぁ、」

ぽろぽろと溢れる感情と後悔の念。
「うぅ……」

◇◆◆◇

「今日は何かあったのか？」
いつもと様子が違うような気がした。まぁ簡単なことで頭に来た自分も悪いと言えば悪いのだが。
「はぁ……」

今日は七夕だったな……。

どうするかなぁ……
そう呟いて帰路についた。

◇◆◇◇

「七夕だなぁ……」

◇◆◇◆

屋根裏の部屋には、もう使ってない望遠鏡が置かれていた。いつ以

来だろう、思い出したのさえ。
「おい、早く来いって」
「ち、ちょっとまってよぉ～」
彼女の手を握った時、自分よりも一回り小さい手に、ふにふにと柔らかい感触。そして何よりもふと微笑んでくれるその笑顔が子供心にすごく嬉しかった。僕は彼女の笑顔が好きなんだろうな。これまでも、これからも。

◇◆◇

望遠鏡は今も変わらずあそこの場所に有るだろうか。彼女は、家にも帰らず河川敷に向かい出した。思い出に頼るように。いかにもふらついた足取りで。

七夕の夜だった。梅雨に似合わず晴天だった夜空に、天の川が写る。それを二人で見に行こうと彼女の手をとって、河川敷の木陰にある影が濃い場所、星が一番綺麗な場所で二人星を眺めていた。
誰にも気づかれない場所で。二人だけで。
天の川を観測しに来たのに、木の葉が邪魔で見えない箇所がある。
彼女は、天の川を彼と一緒に見たかった。
見えない場所がなにか二人を遠ざけてるようで。
過去も、今も天の川は全部見えない。

◆◇◇◆

プルルルル……
「はい」

「あ、うちの娘知らないかしら。まだ帰ってきてないんだけど」
彼女の母親からだ。しかもなにやら帰って来てないのか。
「……あそこかぁ？」
一目散に駆け出すと、河川敷までの距離を走り出す。まだまだ、天の川は流れていて、止まることを知らない。
彦星が天の川を渡って必死に織姫を探して、そっと抱き締めたいと願うように。

◆◇◆◇

「ふぅっ……」
「え？」
「あぁ、やっぱりここか」
「っ……」
言葉を無くしたように、うろたえてる。さっきあんなこと言ってしまったからなぁ。
「いいよ。もういい、さっきのことは水に流そう。俺だって心配したんだ」
「え…？」
驚きに見開かれた目。それからすぐに安堵の笑顔になる
「な？大丈夫だから」
「う、」
「それに、またこの場所に来れたんだからな。久々だよな、八年ぶりか？」
「ううん……十年ぶりだよ。それに、私だって…」
「そうか、そんなにたつのか」
「うん……」
「どした？いつもの威勢が無いぞ？」
「え、あ、いや、そんなことないわよ」

「そっか」
……
「あの……ね」
「ん？」
「ごめん。あと……ありがとう」
「ん。大丈夫だよ。」
やっぱりこの人は優しい。だから私は……。
「天の川、ぜんぶ見えねぇな。枝折るか」
パキッと乾いた音をたてて、天の川がぜんぶ見えるようになる。
「うん。やっぱりこの方がよく見える」
「うん……」
織姫の叶わなかった願い。私は彼と、一緒にいたい。

だから、

「なぁ、」
「あのね、」

え？
二人の声が重なった。
気持ちも、一緒に。

◇◆◇◆

握った手は、温かく、柔らかくて。

握り返した手は、強く、かっこよくて。

織姫と彦星が願った思いを、二人はいつまでも。

笑って笑って。

◆◆◆◆

（後書き）

こんなラブコメしたいなぁ……。

っていうかラノベの主人公は無条件でモテモテだもん……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2599ba/

恋の七夕

2012年1月6日17時51分発行